

学会だより No. 96 2012年10月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

☆第77回哲学会大会のお知らせ

今秋は下記の要領で第77回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2012年10月28日（日） 10：00～17：00

会場：上智大学12号館1階102教室

★プログラム

I 研究発表 10：00～12：00

○ 織田 理史（本学博士前期課程）

ドゥルーズにおける創造とその射程

—「差異と反復」の多様体の概念を中心に—

○ 浜田 郷史（本学博士前期課程）

「幾何学」に何ができるか

—カント『純粹理性批判』における幾何学の可能性と直観の理論—

○ 三浦 太一（本学博士後期課程）

プラトン『パイドン』の「親近性の議論」における魂の全体像

——休憩——

II 総会 13：00～13：15

III 講演 13：20～14：20

○ 野矢 茂樹（東京大学教授）

「バラは暗闇でも赤いか」

IV シンポジウム 14：30～17：00

○ テーマ：語りと沈黙—今日、宗教思想の行方—

提題者：田島 照久（早稲田大学教授）

永井 晋（東洋大学教授）

田中 裕（本学哲学科教授）

司会：長町 裕司（本学哲学科教授）

V 懇親会 17：30～19：30

会場：上智大学11号館7階第2会議室（前回と会場が異なります）

会費：学生2,000円 一般3,000円 本学哲学科教員5,000円

☆ シンポジウム「語りと沈黙—今日、宗教思想の行方—」趣旨

此の度のシンポジウムでは、今日の歴史的な精神状況においても独創性とアクチュアリティを示す宗教思想の脈から、本主題の〈語りと沈黙〉へと収斂してゆく幾つかの消尽線を描き出す御提題をいただく。早稲田大学の田島先生は、ご専門のドイツ神秘思想（マイスター・エックハルト）が、どのような思想要因をもって 20 世紀以降の哲学思索と宗教的思惟に波紋を投げかけ、問題の深層を対話的に開くかをお話下さる。東洋大学の永井晋先生には、今日の現象学的思惟の最前線から、この思惟のフランスにおける発展段階における「神学的転回」を経て宗教思想上焦眉となる問題構制を開陳していただく。最後に本学哲学科・哲学研究科の田中裕先生には、西田幾多郎の哲学思索から開かれた宗教思想的境地を、21 世紀以降更に考えてゆくべき問題脈絡と共に御提題いただくことにする。三人の先生相互の討議は最小限に留め、来聴される会場の皆様全員と思索の道を進めたい。

（本学哲学科教授 長町 裕司）

☆ シンポジウム「語りと沈黙—今日、宗教思想の行方—」提題要旨

魂の根底と始原—エックハルトの場所論

田島 照久（早稲田大学教授）

「語りと沈黙」という観点からエックハルトの思想を見渡すならば、一切の被造性（時間性、多数性、身体性）を離脱した（沈黙した）魂の内に、神の子が誕生（神のロゴスが現出）するという「離脱の教説」と「魂の内での神の誕生の教説」が浮かび上がってくる。

今回採り上げたいのは、上記を踏まえ、エックハルトの反汎神論的合一理解として、①媒介者、仲介者としての子を通じて神認識が成立するという彼の *species* 論とさらにそれを超えいく無媒介的・神認識の段階の問題であり、この観点からはフランスの現象学者ミシェル・アンリのエックハルト解釈にも多少触れることになる。

つぎに②として万有在神論的観点から、神のロゴスが生起するとされる「魂の根底」という場所（コーラ）に関する問題である。神は一切の神性をたずさえて魂の根底に住まいするとされ、この時間的世界における神のノエシス的働き（働き）の場所が離脱の場である魂の根底であるとされているが、『ヨハネ福音書注解』では、神が在り、世界を創造し、子を生む、その場所が「始原」とされ、「永遠の第一の単一なる今」(*primum nunc simplex aeternitatis*)と呼ばれる。つまり「始原」とは、神が働く永遠の場所ということ

になる。「本質的始原論」の構造を踏まえた上で、エックハルトの二つの「今」(nû) 理解をてがかりに、彼の永遠理解を見ていきたい。ボエティウスの「永遠とは、果てしなき生命の、同時に全体的な、完全な所有である」、という永遠の定義を踏まえた上で、ボエティウスの「初めの果て」と「終わりの果て」を欠く「永遠」理解から、両者の「果て」を一致させることによって「永遠」を「今」(nun,nû) すなわち瞬間として定位しようとする独自の永遠・時間論が展開されている。そして最後に「魂の根底」と「始原」の理解から西田の「絶対無の場所」との対話を試み、これからの宗教思想の在り方を考えてみたい。

*

「神名の沈黙」と「語ること」

永井 晋（東洋大学教授）

ユダヤ神秘主義カバラーの神経験において、神は世界に現れるに先立って、自己の内部で原初の一点に自己凝縮し、そこから文字として自己分裂／自己展開したとされる。この「内部」、「自己」という特性によって、神は「一者であることをやめることなく多／他なるものへと分裂展開する」という逆説が可能になった。この原初点の内的自己展開として22のヘブライ文字が生成する。それらの組み合わせによってトーラーのテキストは成立し、それが神と人間との間の媒介となるのである。神の側から生成したこの媒介を通して、創造によっていったん神から分離した人間の側から改めて神へと関わる手段がこの媒介テキストの解釈である。カバラーの特殊性は、この媒介テキストを神の外部世界への啓示=世界地平への現出ではなく、神そのものの内的自己限定という特異な「現象」とみなす点にあるが、これはカバラー解釈学をして、神から分離した人間が、恋人を愛撫することにも似た極めて繊細な仕方で神の痕跡たるテキストを読み、それを介することで、神から隔たりつつ、しかもその「内部に入ってゆく」ことを可能にし、さらにはそれを要求するのである。

このように、この媒介文字テキストにおいて、神は世界の境界線上に微かに「現れ」つつ、同時にその現れから「身を退く」。この逆説的事態は、その全体が神の名とみなされるトーラーのテキストの中に書き込まれた諸々の神名の中でも、YHVHの聖四文字において告げられるものである。神の内的自己分裂の過程で最初に生成するこの神名を他の神名から区別して特権的なものとするのは、それが決して「発音されない」という点である。それは解釈可能な、すなわち発音し、語り、かくして意味として理解することが可能な文字テキストの只中において、唯一決して語るができない四文字である。テキストの只中に沈黙が刻み込まれている。この沈黙こそがテキストとしての神の

頭現の只中に書き込まれた「神の退去」なのであり、それが常に新たにテキストを解釈し、その意味を動かし、語ることを可能にするものである。これによって、トーラーのカバラー的解釈は、テキストの単なる記号的で平板な理解ではなく、常に新たに創造的な意味解釈をする語り、アナーキーな散種となり、一なる神の生命への参入たりうる。このような神名の沈黙からの語りのみが、テキストの原媒介によって隔てられつつ神そのものに接することとして、偶像を回避せしめるのである。

レヴィナスが『存在するとは別の仕方、あるいは存在の彼方へ』で展開した「語りの現象学」は、カバラーにおけるこの「神名の沈黙への遡行と語り」としての神経験を現象学的還元として改めて反復遂行し、そこからの絶えざる語り直しにおいて「他者としての他者」に向かおうとするものである。あらゆる自己の閉塞を解体して「他者そのもの」へと向かう「語る」とは、その語りが起きる地帯の境界的・両義的性格ゆえに世界、存在、時間の地平の中にすぐさま落ち込み、「語られたこと」としてその動きを止め、記号的意味として凝固して、他者への超越を阻止する偶像となる。そこから新たに「換言」し、偶像を解体して再び「語り直し」、他者の超越へと向かうこと、それがここでの現象学的還元の遂行なのであり、それは語られた意味からそれに先立つ神名の沈黙への遡行によってのみ可能なのである。神名の沈黙への還元的遡行とそこからの新たな語り、それこそが形而上学、すなわち世界と存在の彼方の一者の経験に他ならない。

*

宗教経験に於ける沈黙と語り—西田幾多郎の宗教哲学を手引きとして—

田中 裕（本学哲学科教授）

西田幾多郎の初期の宗教哲学は、一切の思慮分別を越えた「純粹経験」を基盤とするものである以上、主観と客観の二元論、感性と悟性の二元論、事実と意味の二元論など一切の二元的立場を超え出ることを要求するものであった。したがって、それは「純粹経験」を唯一の实在とする一元論（『善の研究』）、ないしは「絶対自由意志」（『自覚に於ける直観と反省』）を究極の立場とする神秘主義として特徴付けられることができよう。

しかしながら、中期以降の西田の宗教哲学はそのような神秘主義の立場をも越えていくような哲学的なロゴスの探求として解釈することができよう。「不二」の宗教的立場は、決して実体的な一元論ではなく、それは同時に「不一」の立場でもある。所謂「絶対矛盾的自己同一」の論理とは、鈴木大拙の云う「即非」の大乘仏教思想に示唆されたものであったが、西田の場合は、単に禅宗や浄土真宗の伝統だけが念頭におかれたのではない。それは、東洋や日本というローカルな種的存在を越える普遍性、究極の普遍的・

超越論的なる述語の場にほかならぬ「絶対無」の場に立つものであった。西田の云う「場所の論理」とは、最も普遍的なる場所において、最も個別かつ実存的である個人を主題とするものであった。それは東西の宗教的伝統の差異を超えて適用され、とくに聖書やキリスト教的プラトニズムの伝統の中において形成された宗教経験にも適用され得る普遍的なロゴスを志向したものであった。

後期西田哲学は、「自己が自己の内に自己を映す」というごとき中期の西田の立場、すなわち自己からはじまり自己に完結する自己同一性に立脚する哲学ではもはやない。それは、自己ならぬ「絶対の他」との関わりを哲学的に主題化し、「自覚の場」が同時に「創造の場」でもあるという独自の歴史哲学と創造論・救済論に立脚する宗教哲学でもあった。

本発表では、このような普遍性・世界性を志向する西田の宗教哲学の形成過程を、彼の遺稿集や講義録、日記などを含む包括的なテキストを参照しつつ辿り、とくにキリスト教的プラトン主義—アウグスチヌス・エリウゲナ・エックハルト・クザーヌス・ペーメの伝統の西田による批判的摂取、次に、西田と同時代のドイツの弁証法神学、とくにバルト神学との対決の中で西田の宗教哲学が、いかにして世界の宗教哲学として形成されたかを示したい。

☆ 講演要旨

「バラは暗闇でも赤いか」

野矢 茂樹（東京大学教授）

「バラは暗闇でも赤いか」という問いおよび「バラは誰が見ていなくとも赤いか」という問いを考える。

この問いを問う背景を簡単に説明しよう。今回はその点については議論しないが、私は、知覚は世界の表象（representation）ではなく世界の提示（presentation）であると考えている。世界の提示様態には、有視点的なものと無視点的なものがある。知覚は、主体の内に形成された世界の表象ではなく、有視点的な世界の提示であり、そこに提示されているものは世界のものとそのものである。

ある眺望を「知覚する」とは、主体の内に表象を形成することではなく、その眺望と「出会う」ことに類比的なのである。それゆえ、眺望は誰が見ていなくとも存在する（眺望の実在論）。この立場から、「バラは誰が見ていなくとも赤いか」という問いに対しては、「誰が見ていなくともバラは赤い」と答えることになる。では、「暗闇でも赤いのか」

という問いに対してはどう答えるべきか。これが今回の問題にほかならない。

この問題に向かったとき、はじめ私は「色は感覚なのか、物の性質なのか」という形で考えていた。そして、眺望の实在論に基づき、色は主観の内に引き起こされた感覚ではないと結論し、色は物の性質であると考えた。そうだとすれば、暗闇でも赤いバラは赤いということになるだろう。

だが、暗闇でもバラは赤いと考えることは、真空中で爆音が響きわたる想像と同様のナンセンスではないか。そう考えた私は、「バラは誰が見ていなくとも赤いか」という問いに対しては「イエス」という答えを保持しつつ、「バラは暗闇でも赤いか」という問いには「ノー」という答えへと導かれた。これは一貫しない態度だろうか？

結論だけ示しておこう。光は色を経験するための条件ではない。振動の媒体が音の存在にとって不可欠であるように、光は色が存在するための条件である。それゆえ、光がなければ色はない。色は感覚でも物の性質でもなく、物の物理的な表面特性と光によって生じた世界のできごとなのである。他方、眺望の实在論より、知覚主体は色の存在の条件ではない。それゆえ、誰が見ていなくともバラは赤いとされる。

赤さに関わる物の性質は赤さという色ではなく、光が当たるとその物の表面に赤さが生じる傾向性であると言えるだろう。だが、それは見られることによって赤さの感覚を知覚主体の内に引き起こす傾向性ではない。見られることによって赤くなるという傾向性などありはしない。

私は同じことを「甘さ」についても言いたい。誰が食べていなくとも甘い大福は甘い。甘さは食べることによって主体の内に引き起こされた感覚ではない。有視点的に提示された世界は、視覚的・聴覚的・触覚的・嗅覚的・味覚的性質に満ち溢れている。

☆ 個人研究発表要旨

ドゥルーズにおける創造とその射程—「差異と反復」の多様体の概念を中心に

織田 理史（本学博士前期課程）

ドゥルーズは、「ベルグソンの哲学 *Le bergsonisme*,1966」から、晩年の「哲学とは何か *Qu'est-ce que la philosophie?* ,1991」に至るまで、「多様体」という概念を、頻繁に用いている。しかしそれはドゥルーズに極めて独特の意味であるし、それぞれの時期における著作での意味合いも、絶えず変わっていったように思われる。

そこで本発表では、「差異と反復 *Différence et répétition*,1968」における多様体に焦点を当て、そこでの独特の用法や、哲学的意義を明らかにすることを目的としたい。特に

この著作においては、多様体概念の、差異(強度)の概念と、アイデア(理念)との密接な関係が特徴的である。そこで、上述の最終目的は、「差異と反復」第四章、「差異の理念的総合」において特に密に示される、多様体と差異、アイデアとの関係を明示するために、この三つの概念がもつ著作全体での独特の意義について論じ、それらの間の不可分で密接な関係を概論することをもって代えられる。ここでは、加えて多様体のもつ形式とは何か、ということもあわせて論じる。

多様体と差異、アイデアの関係の概論したあと、いよいよ創造の基体としての多様体そのものに踏み込む。どのようにして、潜在的な多様体が創造を担うのか、またそこでの「創造」とはどういうことか、その射程はどこまでか。

以上の問いは、自然と次のような問題にまで延びていく。マヌエル・デランダのようなドゥルーズ研究者は、創造の原理としての強度や多様体の理論が、ドゥルーズを越えて、あたかも物理的な現象にもそのまま応用できるかのように語っているが、それはドゥルーズの多様体論に固有の射程から言って果たして可能なのか。デランダ自身のドゥルーズ論も踏まえつつ、ドゥルーズの多様体論の射程とその応用可能性について明らかにしたい。

*

「幾何学」に何ができるか—カント『純粋理性批判』における幾何学の可能性と直観の理論—

浜田 郷史（本学博士前期課程）

「空間は三次元である。その根拠はわからない。」カントは彼の初めての著作『活力測定考』（1749）で臆面もなくこう書いている。しかし、『純粋理性批判』（1781, 1787）のカントはこうも書いている。「空間は三次元のみを持っている、それは幾何学的に確かなことである」と。

彼の言う幾何学とは何か。若いカントがわからないと言った、空間の根拠を確実なものとして明示する学、すなわち「空間についてその諸固有性を総合的にア・プリオリに規定する一つの学」としての幾何学とは、どのような原理に基づいているのだろうか。

学のあり方を知るには、その学問における判断のあり方を分析してみる必要があるだろう。本発表は、幾何学のあり方を知る手掛かりを幾何学的判断の性質に求める。これは当然ながら、カント的な問題の位相整理を兼ねることになる。カントにおいて幾何学は、周知のように「ア・プリオリな純粋判断」ないし「ア・プリオリな総合判断」と呼ばれているからである。

カントにおける幾何学的判断の根拠は、周知のように「純粋直観」である。しかし奇

妙なことにカントはこの概念を、経験的直観の「単なる形式」としても理解するように主張する。つまり幾何学における「空間は三次元である」という判断の根拠は、経験という別の領域の根拠でもある、と言われるのである。カントははっきりと、経験が空間表象によって初めて可能だと述べている。したがって（１）幾何学が提供する空間についてのわかり方は、（２）経験の可能の条件としても使えることになるだろう。本発表では、幾何学の経験との必然的（形式的）適合というカントのこの主張を重く受け止め、経験に対する幾何学の「不可欠性解釈」と呼ぶことにする。また（１）と（２）の差異を、直観概念における純粹とア・プリオリの差異に求め、これを感性論一般の前提となる問題構制として論じたい。

本発表は上述のような観点において、カントの『純粹理性批判』の「超越論的感性論」における幾何学論、中でも特に幾何学の可能性を説明するとされた「純粹直観」の概念を考察する。上に述べた二重の性格を読み取ることのできるような幾何学とはいかなるもの（でしかない）かについて論じることで、カントが見定めている幾何学の本質の一端を捉えることを期待する。

*

プラトン『パイドン』の「親近性の議論」における魂の全体像

三浦 太一（本学博士後期課程）

プラトン対話編『パイドン』における五つの魂の不死証明のうち、第三番目にあたる「親近性の議論」（78b-84b）では、魂が神的にして不滅なものに「似ている」という観点から不死の証明がなされている。証明としての妥当性については批判と肯定の両方の立場から、既に多くの議論がなされている。

しかしながら、「親近性の議論」の文脈における魂の実態を解明するという課題は依然として残っている。というのも、それぞれの証明において魂の扱い方には差異があり、「親近性の議論」におけるその特徴についての言及は未だ不足しているからだ。すなわち、最初の証明である「生成の円環説」では、「人間達の魂」という一般的な魂の不死を、あらゆるものは自らの反対のものから生じるという法則から導き出しており、ここでは魂が持つべき能力や実質的内容については語られない。続く「想起説」では、身体による感覚把握を行う以前に、何らかの認識能力を我々が持つことから、身体を持つ前の魂の先在が証明される。ここでは魂と呼ばれているものは単純化された一つの認識能力である。

他方、「親近性の議論」では、ソクラテスが「我々自身の一部は身体であり、一部は魂なのではないかね？」と自身を大きく切り分ける所から議論が展開される。ここで扱

われているのは、前の証明とは異なり、彼ら自身の中にあるはずの魂全体であり、この時点では魂に何が含まれているかは分からない。そこで、見える／見えない、感性的／知性的、被支配的／支配的、という三つの基準からふるい分けることによって、魂は神的にして不死のものに、身体は人間的にして可滅的なものに似ていると議論が進められる。我々自身の一部である魂の本来のあり方についての合意形成が、不死証明と同時に行われている。

対話の参加者の間で魂についての理解に不一致を残したまま、一方的に仮定された「魂」に不死を証明したところで意味はない。もちろん、魂の理解そのものが非常に困難な問題である。更には、「生成の円環説」や「想起説」とは違い、実質をもった魂全体を探究する場合、事態は一層難しくなる。魂全体を自らの中に把握し、合意を得るという困難な作業が「親近性の議論」では試みられている。

本発表は、「親近性の議論」における魂の内容と、それについての合意の実態を確認する。ソクラテスはまさにここで魂の全体像を提示しており、同時に、合意の不十分さと、彼が提示した全体像の中にある問題が後続する二つの証明を呼び起こしている。これら両方の点において、「親近性の議論」は『パイドン』において決定的な役割を持つことになる。

☆第 76 回哲学大会報告記

去る 6 月 24 日（日）に第 76 回哲学会大会が催されました。この大会では、「初期シェリングにおける「同一哲学的誤謬」の由来—『自我について』における最高原理の自己定立に見る「質的差異の消失」—と題する高木駿氏（一橋大学大学院修士課程）の研究発表、「デュルタイにおける追体験の意義—理解および体験としての追体験—」と題する森成海氏（本学博士前期課程）の研究発表、「カントの自然理解に係わる目的論と機械論の問題」と題する山浦雄三氏（本学博士後期課程）の研究発表、「ドイツ神秘思想の思想史的意義をどのように評価すべきか」と題する阿部善彦氏（日本学術振興会特別研究員・早稲田大学）の研究発表が行われました。また、松本史朗氏（駒澤大学教授）には、「道元思想」と題した講演をいただきました。以下に報告記を掲載いたします。多くの参加者を得て、大会は盛況のうちに開催されたことを合わせてご報告申し上げます。

「道元の思想」

松本 史朗（駒澤大学教授）

松本先生は道元の思想の前期・後期の変容とその解釈をテーマに講演されました。まず先生は「道元の晩年の著作である一二巻本『正法眼蔵』をどのように位置づけるか」という問題を提起されました。一二巻本は一九三〇年まで発見されなかったため道元思想と言えれば前期の思想とされ、この晩年の著作に関しては十分に研究されてきませんでした。しかし、そこでは、これまで道元思想として理解されてきたような「仏性」の語が皆無であり、前期の『弁道話』や七五巻本『正法眼蔵』にみられる思想とは異質の思想が表現されているのです。この思想的変化をきちんと見定めることが重要です。ところが曹洞宗の伝統宗学では道元を無謬であるとみなし、思想的変化を認めません。その根拠は、道元の前期思想が書かれた『弁道話』の「……、一生参学の大事ここにをはりぬ」という、自らを悟った者と位置付ける記述です。しかしながら、松本先生によれば道元の思想は変化しているのであり、後期道元は自らの前期思想を批判していると解釈可能なのです。というのも前期道元は「仏性内在論」を批判し、「仏性顕在論」の立場をとっていましたが、後期道元は「仏性顕在論」をも批判しているからです。

この点を明らかにするために、先生は仏性思想に関して基本的な事柄を確認されました。仏性思想（如来蔵思想）は、ヒンドゥー教のアートマン（我・肉体の中の純粹精神）の思想から影響を受けて大乘仏教内に形成されたものです。インドの仏性思想では、「仏性は衆生（人間）の肉体（心臓）の中にある」と説く「仏性内在論」でした。これが中国の一部の思想家において発展したものが「仏性顕在論」であり、これは「仏性は事物において全面的に顕れている」または、「事物そのものが、仏性の顕れである」というものです。例えば中国の僧、吉蔵は『大乘玄論』内で「以依正不二故、衆生有仏性、即草木有仏性」、つまり「衆生という有情に仏性があるのだから、無情である草木にも仏性がある」と述べています。

以上の点を踏まえ、先生は道元の思想の変容を明らかにします。後期道元は、「山河をみるは如来をみるなり、三毒四倒、仏法にあらざることなし。微塵をみるは法界をみるにひとし、…」という仏性顕在論の思想を、「ある人の思想」という形で批判しています。しかし先生によれば、ここで批判の対象になっている「ある人の思想」は、他ならぬ前期道元自身の思想として解釈できるのです。前期に書かれた七五巻本『正法眼蔵』「仏性」巻に、「この山河大地、みな仏性海なり。……山河をみるは、仏性をみるなり」（「山河はすなわち仏性である、山河を見るということは、仏性を見ていることである」という記述があり、また、前期の「法華転法華」巻には「微塵をみるとき、法界をみざるにあらざ」という記述があります。こういった前期道元の思想は、後期道元によって批判されている「ある人の思想」と酷似した内容をもつのです。

とはいえ、道元の後期の思想が、道元の本来の思想として理解されるべきであるかと言え、そうとも結論できず、事情はより複雑です。仏性顕在論を批判した後期道元は「因果」、つまり縁起を仏教の本質とみなしています。「道元の思想的変化は、非仏教的な仏性思想から仏教的な縁起説への変化とみることができ、後期道元にも如来藏的思考が認められるため、後期道元を絶対視することもできない」と先生は解説されました。一筋縄では理解できない道元の思想遍歴がとても生き生きと印象深く語られた講演でした。

(本学博士前期課程 金山 桃子)

☆事務局からのお知らせ

- ◇学会費納入をお願いいたします。現在の年会費は、一般正会員が3,000円、大学で専任教員の職にある正会員が4,000円です。会費納入に際して郵便振替をご利用の場合、領収書は払い込み票をもって代えさせていただきます。なお学会費納入額に関しては封筒のラベル右下に記載されております。振替手数料は、恐縮ですがご負担くださいますようお願いいたします。哲学会大会当日も、受付で納入を承っております。また、学会費を二年以上にわたって納めていない方に対しては、『哲学論集』の送付を停止させていただきます。さらに五年以上にわたって未納の方には、「学会だより」の送付も停止させていただきます。どうか学会費の早期納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。また、請求内容に不明の点や間違いがある場合には、お手数ですが事務局までご連絡ください。
- ◇住所や電話番号の変更、所属等の移動があった方は、会費納入の郵便振替表の通信欄か葉書、メール(tetsuken32383801@yahoo.co.jp)ですみやかに事務局まで届け出てくださいようお願いいたします。お送りしたものが「転居先不明」で返送されてくるケースが毎回散見されますので、ご協力をお願い申し上げます。とくに新入会員のみなさまで今年4月以降住所を変更された方は、入会后通信物が一切届かないということにもなりかねませんので、忘れずお知らせください。(記：事務局 早川正祐)

『哲学論集』原稿募集

『哲学論集』第42号（2013年10月刊行予定）に掲載する研究論文を下記の要領で募集いたします。

○提出締切：2013年4月末日消印有効

○字数制限：注を含め16,000字以内（400字詰め原稿用紙40枚以内）

○注意事項：原稿はオリジナル1部とコピー4部、計5部を提出すること。ワープロ原稿（パソコンのもの）であることが望ましい。注こみの字数を必ず明記すること。

論文掲載権は、編集委員会に一任される。

※字数に関する規定が厳密になりましたので、注意してください。

【投稿先】

上智大学哲学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

※持ち込みか、郵送でお願いします。

※問い合わせに関しましては、電話・ファックス・電子メールでも結構です。

TEL：03-3238-3806 FAX：03-3238-4414

E-mail：tetsuken32383801@yahoo.co.jp